

第 105 話〈岩戸村長〉の要約と参考資料

第 105 話〈岩戸村長〉の要約

戦前の岩戸村の甲斐徳次郎村長と土呂久の関係を見直してみました。獣医の報告記や新聞記事に残っている甲斐村長の活動の跡から、浮かんできたのは、表に立つことなく背後で和合会を指導した戦略家、獣医師などに自分の意思を代弁させた総監督の姿でした。

第 105 話〈岩戸村長〉の参考資料

105-1 甲斐徳次郎さんの経歴

高千穂町史 P336~337 より

(第 6 1—5 と重複)

岩戸村長

第 12 代~17 代 甲斐徳次郎 大正 13 年 3 月 14 日~昭和 21 年 11 月 7 日

第 20 代 甲斐徳次郎 昭和 30 年 4 月 8 日~昭和 31 年 9 月 30 日

甲斐徳次郎 生年月日 明治 23 年 9 月 5 日

高千穂町史

(第 6 1—5 と重複)

第 14 編人物 15. 甲斐徳次郎

甲斐徳次郎は高千穂町大字岩戸野方野に生まれた。日本大学で社会科、明治大学で自治科を学び、大正 13 年 (1924 年) から岩戸村長を連続 6 回、通算 25 年 5 か月勤め、又昭和 6 年 (1931 年) より同 21 年 (1946 年) まで、県会議員に連続 15 年間勤めた。そして昭和 36 年以来、高千穂碑建立運動 1 本にすべてを打ち込み、佐々木信綱博士ほか 70 余名を発起人に、同碑建設協賛会を組織し、自信は常任理事の位置にあつて、募財を続け、昭和 41 年 11 月、名誉総裁高松宮殿下の臨場を仰いで除幕式を挙げた。建碑は、日本の歴史が神話時代にはじまることにかんがみ、「国の歩みの元標」にするために計画されたもので「新しい時代の新しい愛国心」涵養を目的とするという。(略)

徳次郎が昭和 39 年の御歌会始めに詠進した。

杉植ゑて葉守の四手と山口の

ひともとの秀はに白紙をゆふ

の心がいつまでも理解できる教育が切に望まれる。

宮崎日日新聞死亡記事 (1980 年 4 月 15 日)

甲斐徳次郎 (かい・とくじろう=西臼杵郡高千穂町名誉町民) 14 日午前 1 時 15 分、前リツセン炎のため、入院先の高千穂町立病院で死去、89 歳。自宅は同町岩戸 7655。葬儀

は15日午後1時から自宅で仏式。喪主は孫頌一郎氏。

明治37年高千穂高等小学校卒業、大正11年明治大学自治科修了。同13年から昭和21年まで岩戸村長、在任22年8ヶ月。また同7年から21年まで県議を務めた。政治、文化の両面で活躍し、特に高千穂文献碑建立に当たっては功績が大きく、郷土史家としても知られた。52年3月に名誉町民に選ばれた。

105-2 岩戸村の立場

甲斐徳次郎さんの話（1972年1月19日聴取）

鉾山は国としても優遇していたので、鉾山をつぶすわけにはいかんし、一方、部落の人の訴えを捨ておくわけにはいかんし、調停はしたんですがね、煙害料を払うように。県なんかも少々の被害を訴えても問題にされんかったですからね。ことに戦時中は（公害と言って）今みたいじゃないですよ。私は部落の人の陳情はとりつぎました。県は林務課、畜産課、被害の物件によっては衛生課がやらねばならん。

105-3 川原一之筆原稿「甲斐徳次郎さんと土呂久」（かなたのひと3号用）

仕掛け人

1973（昭和48）年3月に刊行された「高千穂町史」の人物編に、甲斐徳次郎さんが紹介されています。そこに次のような経歴が載っています。

「日本大学で社会科、明治大学で自治科を学び、大正13年（1924年）から岩戸村長を連続6回、通算25年5か月勤め、又昭和6年（1931年）より同21年（1946年）まで、県会議員に連続15年間勤めた」

大正時代に祖母・傾連山の麓の岩戸村から首都東京に出て、2つの私立大学で勉学に励んだ人だったのか！ もっとびっくりしたのは、村長をしながら県会議員になっていたことです。戦前は、村長と県会議員の兼務が許されていたのでしょすが、そんな二刀流に挑戦したことも、地方行政へのこだわりが並みではなかったことを示しています。

地方の政治家を志していたことがわかると、徳次郎さんが亜硫酸煙害事件にどんなふうに関わったか、見つめ直したくなりました。土呂久の歴史に徳次郎さんが登場したことが3度ありました。順を追って整理してみます。

（1）1925（大正14）年4月、亜硫酸鉾山周辺で死んだ牛の原因究明

1. 1924年秋、岩戸村長の徳次郎さんの依頼で高千穂警察署の衛生技手らが土呂久の病気の牛馬を診断し、「病名をつけることができない」と報告。
2. 1925年4月6日、土呂久で1歳2か月の黒毛牝牛が死亡。

3. 4月7日、西臼杵郡畜産組合長の徳次郎さんの指示で、鈴木日恵獣医が死んだ牛を解剖。
4. 4月8日、徳次郎さんは斃牛の内臓などを詰めた小瓶を県警察部衛生課に持ち込み、死因を解明するための鑑定を依頼。県の職員から冷たく対応されるが、鑑定材料を置いて帰る。
5. 4月12日、池田牧然獣医が亜硫酸鉍山周辺で起きた異変の報告記を作成。疑問は、池田獣医が自発的に報告記を書いたのか、それとも徳次郎さんの指示によるものか？
6. その後、県から鑑定結果の連絡はなし。

疑問を解くカギは、報告記が「諸賢のご指導を仰ぎ度いと思います」と結ばれていることと、6月3日の日州新聞に書かれた次のくだりにありました。

「同地方を調査した者の報告を見ると、亜硫酸工場の付近は、これまで盛んにできていた椎茸も蜜蜂もみんなできなくなったり、死んでしまっており、牛馬も同様だと言っている」

ここにでてくる「報告」は、池田さんが書いた報告記のことです。報告記は最初から、印刷して関係者に配布し、指導を仰ぐことを前提にして作成されています。これは、池田獣医個人の判断でできることではありません。西臼杵郡畜産組合の用箋に書かれていたことを考えても、組合長である徳次郎さんの指示によって作成されたとみるのがふつうでしょう。そう考えて、死んだ牛の原因究明の経過を振り返ると、すべての動きが徳次郎さんの監督下にあったように思えてきました。

(2) 1934（昭和9）年7月、和合会が内務省に亜硫酸精錬絶対反対を陳情

1. 1933年8月、中島飛行機の系列下にはいり、鉍山の目的が亜硫酸製造から錫生産に転換。
2. 1933年11月、和合会は亜硫酸煙害による被害調査をおこない、鉍山主任と交渉することを決める。
3. 1934年（月日は不明）、鉍業権が竹内令さく（貝へんに乍）氏から中島門吉氏に移転し、中島氏は新たに鉍業の内容を登録。
4. 7月12日、内務省は、和合会から送られてきた「亜硫酸精錬絶対反対」の陳情書を宮崎県へ回付。
5. 7月12日、岩戸村長の徳次郎さんが県に出向いて「絶対不許可主義」を陳情。疑問は、なにに対しての絶対不許可なのか？
6. 7月13日、延岡新聞が「直接内務省に 亜^ひ硫酸精製 絶対反対陳情の岩戸村民」の見出しの記事を掲載。
7. 1934年3月と5月、和合会は6人の委員を選んで鉍山主任と交渉することを決める。

8. 1935年2月、和合会議事録に「亜砒製薬も遠からず土呂久にては止む模様」との記載。

この一連の経過で、岩戸村長の徳次郎さんが県に出向いたとき、なにに対して「絶対不許可」を陳情したのか、長い間わかりませんでした。最近、鉱山経営の規範を定めた「鉱業法」を調べてみました。事業者が鉱業権を取得したいと願い出たときに、その事業が「保健衛生上害がある場合」や「農林業などの利益を損する場合」は、行政は鉱業権の申請を不許可にできることがわかりました。徳次郎さんが県に対し、亜砒酸製造によって保健衛生上の害が生じ、農林業などに損害を与えているので、鉱業権者の申請を不許可にしてくれ、と申し出たと考えると、このときの一連の動きがすーっと解けてきました。

発端は、1933（昭和8）年8月に国内有数の戦闘機メーカー中島飛行機会社の系列鉱山が、土呂久の亜砒酸鉱山を買って、飛行機に必要な錫の開発を始めたことです。1934年に、鉱業権が亜砒酸鉱山の竹内氏から錫鉱山の中島氏に移転した機をとらえて、和合会は4段階の闘いを展開したのです。

①亜砒酸鉱山によって受けた被害の状況の調査、②被害調査をもとに、錫鉱山の主任に亜砒酸製造はやらないように要求、③内務省に、錫鉱山が亜砒酸を製造することに絶対反対と陳情、④岩戸村長が県に対し、錫鉱山に亜砒酸製造を許可するな、と訴える。この4段階の闘いの成果が、和合会議事録の「亜砒製薬は遠からず止む」という記載から読み取れます。その後、鉱山が主産物の錫だけでなく、副産物として亜砒酸の生産も始めたので、勝利にはいたりませんでした。いったんは中止に近いところまで追い込んだのです。

錫鉱山の経営者は、軍国主義化が進む日本で軍用機生産一、二を競っていた中島飛行機会社の系列鉱山です。日の出の勢いの軍需産業傘下の鉱山を相手に、鉱業権者交代の機をとらえて、内務省を巻き込んだ闘いを仕掛けたことがわかってくると、ただただ感服するしかありません。この戦略を考えたのは、相当に大胆な知恵者でしょう。いったい誰が計画、立案、実行したのだろうか。和合会の役員に、中央省庁を巻き込んだ壮大な作戦を立てる切れ者がいたのでしょうか？ それとも徳次郎さん……？

（3）1941（昭和16）年、鉱山と和合会が結んでいた契約満了、亜砒酸製造中止に

1. 1941年2月、鉱山と和合会が結んだ亜砒酸製造を認める契約満了。和合会が契約を更新しないことを決定。
2. 鉱山は、和合会の契約解除の通知を無視して亜砒酸製造を継続。
3. 1941年4月、岩戸村が宮崎県に亜砒酸製造をやめさせるように陳情。
4. 県から連絡を受けた福岡鉱山監督局が、和合会に出頭を要請。
5. 和合会の代表6人が福岡鉱山監督局に出向いて説明。
6. 監督局の代表団が土呂久現地の調査。

7. いつの間にか亜硫酸製造が終わり、すっきりしない幕切れ。

1941年2月の契約満了から亜硫酸焼きの煙が流れなくなるまで、和合会はひるむことなく亜硫酸製造反対の姿勢を貫きました。岩戸村長の徳次郎さんは、和合会を励まし応援をつづけました。その証が、岩戸村から宮崎県にあてた陳情書の下書きです。時代は、日中戦争から太平洋戦争に拡大する10か月前。軍需産業中島飛行機傘下の鉾山を相手に、絶対反対の姿勢を貫徹し、亜硫酸製造を中止させたのはかなりすごいことでした。和合会が初めて鉾山に勝利できたのは、全体の状況を見渡し、冷静に経過を観察し、的確な指示をうち出した人物がいたからです。地方の政治家というよりは熟達した戦略家。徳次郎さんの鋭い眼光が、土呂久のうしろから、じっと闘いの進展を見守っていたにちがいありません。

土呂久の歴史に3度登場した徳次郎さんの行動を振り返ってみました。ここから浮かび上がった徳次郎像は、岩戸村長、西臼杵郡畜産組合長、宮崎県会議員を兼ねた地方の政治家。土呂久の闘いを勝利に導いた戦略家。一貫していたのは、農民を苦しめる亜硫酸煙害に反対する姿勢でした。地方の政治家を志した根っこには、農業、畜産業、林業を守り育てることがあったのだと思います。だから、たとえ国策であっても、農民を苦しめる鉾山優先策は許せなかったのではないのでしょうか。